目白大学　心理学研究
第4号　2008年101－109

原著

完全主義と帰属スタイルおよび抑うつの関連の検討

目白大学大学院心理学研究科　齋藤路子
目白大学人間学部　沢崎達夫
目白大学人間学部　今野裕之

【要　約】

本研究の目的は，完全主義と帰属スタイルの関連の検討，および完全主義が抑うつに至るプロセスに関するモデルを構成し，共分散構造分析による検討を行うことであった。大学生444名は完全主義，内的安定的帰属スタイル，抑うつを測定する質問紙に回答した。その結果，完全欲求および高目標設定は成功場面でも失敗場面でも内的安定的帰属と関連する一方で，失敗過敏および行動疑念は失敗場面のみ内的安定的帰属と関連することが示された。共分散構造分析の結果，(a) 適応的完全主義が強いほど，対人領域における成功に対して内的安定的帰属をしやすく，ポジティブ感情が強まること，(b) 不適応的完全主義が強いほど，対人領域における失敗に対して内的安定的帰属をしやすく，抑うつが強まることが示された。最後に，完全主義が抑うつに至る認知プロセスについて介入方法も交えて議論した。

キーワード：完全主義，帰属スタイル，抑うつ

問題と目的

日常生活において，何か物事を遂行しようとするとき，実現不可能な目標を立てたり，ミスを過度に恐れたりすることがある。しかしながら，あまりに高い目標は実現できることは稀であり，ミスをしないで物事を遂行することは困難である。そのため，このような傾向が強いと，抑うつといった心理不適応に陥りやすく，この心理不適応と強く関連する心理特性を完全主義（Perfectionism）という。この完全主義は，臨床場面で顕著に現れる心理特性であり，とりわけ抑うつと関連することが一般的に知られている。そのため，完全主義から抑うつに陥らないための効果的な介入方法が求められている。

Hewitt & Flett（1991b）は完全主義を多次元的な概念と考え，多次元完全主義尺度（Multidimensional Perfectionism Scale）を作成した。この尺度は，自己に向けられた完全主義に関する次元（自己志向的完全主義），他者に向けられた完全主義に関する次元（他者志向的完全主義），他者が自分に非現実的な要求を課しているという一般化された信念や認識に関する次元（社会規定的完全主義）の3次元で完全主義を捉えている。この3次元からなる尺度を用いて不適応との関連を検討した研究は多く，それらの研究では，自己志向的完全主義と社会規定的完全主義が不適応と関連するという一貫した傾向が見出されている。たとえばHewitt & Flett（1991a）では，自己志向的完全主義と社会規定的完全主義が抑うつと正の相関を示している。桜井・大谷（1997）は，自己志向的完全主義が高いほど抑うつや絶望感に陥りにくいという大谷・桜井（1995）の結果を受けて，自己志向的完全主義が精神的健康にポジティブな面とネガティブな面の2側面が存在することを想定し，多次元自己志向的完全主義尺度（Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale）を作成した。この尺度は，4つの下位尺

度から構成されている。具体的には，完全でありたいという欲求（Desire for Perfection）である「完全欲求」，自分に高い目標を課する傾向（Personal Standard）である「高目標設定」，ミス（失敗）を過度に気にする傾向（Concern over Mistakes）である「失敗過敏」，自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向（Doubting of Actions）である「行動疑念」の4つである。このうち，「高目標設定」は抑うつや絶望感と負の相関であるが，「失敗過敏」「行動疑念」は抑うつや絶望感と正の相関があり，自己志向的完全主義に適応的側面と不適応的側面の2側面があることが明らかになった。以上から完全主義と抑うつが関連することは，数多くの研究によって明確であると言える（たとえば，桜井・大谷，1997）。

近年では，完全主義が抑うつに至るプロセスに焦点を当てた研究が増えてきている。たとえば伊藤（2004）は，完全主義といった心理的要因だけでは抑うつの持続，重症化は起こらず，抑うつの持続，重症化が引き起こされるには，ネガティブな反すうが介在することを示唆している。また大谷（2004）は，完全主義者の統制不可能事態への対処行動に着目し，不完全を受容できない者が自己に関する統制不可能事態に直面したときの対処と，対処の精神的健康への影響について検討した。その結果，「自己擁護」的対処だけが「自己評価的抑うつ」に負の影響を及ぼすということを明らかにした。さらに石田（2005）は，完全主義者の情報収集行動に着目し，完全主義者の情報収集方法，および成果への影響について検討し，完全主義傾向の高い人物ほど周辺情報を過剰に収集し，結果的にテスト得点が低くなることを示した。大谷（2004）や石田（2005）の研究は，いずれも完全主義者の行動面に焦点を当てた研究といえる。完全主義者は，困難事態に直面した場合の行動が不適切であるために不適応的な状態に陥るという考え方である。しかしながら，完全主義者には，行動面だけでなく認知面も不適応につながりうる特徴がある。たとえばTangney（2002）によると，完全主義者は，全か無かの思考に没頭する傾向があり，そして失敗を過度に一般化する傾向があるという。このような完全主義者の認知的特徴が完全主義者の精神的不適応に関連している可能性がある。そこで本研究では，完全主義者の認知的特徴に焦点を当て，不適応との関連について検討を行う。

完全主義と抑うつの間を媒介する要因の1つとして，ネガティブな帰属スタイルが挙げられる。Laydenによると，帰属スタイルとは，「ある事柄が起こった原因は何かという問題への習慣的な答えの出し方」である（家接・小玉・田上，2001）。Burns（1980）は，完全主義者を，目標が範囲や理性を超えて高く，不可能な目標に向かって強迫的にかつ絶え間なく努力をし，自分自身を生産性や成果によって完全に評価する人だと定義した。自分自身を成果でしか評価できないということは，完全主義者は物事の原因を自分に帰属するということである。同様に，完全主義者は過度の一般化をするということが知られている（Burns, 1980）。すなわち，一度失敗したら今後も失敗するだろうと考えるということである。これらのことから，完全主義者は物事の原因を内的（自分），安定的（いつも）に帰属すると考えられる。本研究では，完全主義が不適応的帰属スタイルを媒介して抑うつに至るという考えから，完全主義，帰属スタイル，抑うつの関連を検討するが，これによって完全主義者に対して帰属療法が有効であるかどうかに関する実証的根拠を与えるかもしれない。

Chang & Sanna（2001）は，完全主義とネガティブな帰属スタイルが相互に関連して抑うつに至るということを見出した。ただし，Chang & Sanna（2001）は，Hewitt & Flett（1991b）の多次元完全主義尺度を使用しているが，桜井・大谷（1997）の自己志向的完全主義尺度と帰属スタイルの関連は検討されていない。そこで本研究では，自己志向的完全主義尺度を用いて，完全主義と帰属スタイルの関連を検討することを第一の目的とし，完全主義が不適応的な帰属スタイルを媒介して抑うつに至るというモデルについて共分散構造分析を用いて検討することを第二の目的とする。

方法

調査時期

2006年5月下旬から7月下旬にかけて実施した。

調査対象者

東京都および岡山県の大学に通う大学生444名（男性132名，女性312名）であった。平均年齢は20.06歳（*SD*=1.91）であった。

調査の手続きおよび倫理的配慮

東京都の大学生に関しては，講義時間中に質問紙を配布して調査を依頼し，回答終了後その場で回収した。なお，調査への参加は自由意思によること，無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られることを口頭で説明した。岡山県の大学生に関しては，授業の担当教員が質問紙の配布と回収を行い，授業時間に集団で実施された。なお，調査への参加は自由意思によること，無記名回答とすることにより個人の匿名性は守られることをフェイスシートにて教示した。

調査内容

完全主義　桜井・大谷（1997）による多次元自己志向的完全主義尺度（20項目）を用いた。この尺度は，「完全欲求（項目例：どんなことでも完璧にやり遂げることが私のモットーである）」「高目標設定（項目例：自分の能力を最大限に引き出すような理想をもつべきである）」「失敗過敏（項目例：人前で失敗することなど，とんでもないことだ」「行動疑念（項目例：何かをやり残しているようで，不安になることがある」の4下位尺度からなる。回答は「1全く当てはまらない」から「5非常に当てはまる」の5件法により評定を求めた。

帰属スタイル　家接他（2001）による内的安定的帰属スタイル尺度（12項目）を用いた。この尺度は，「達成領域・成功場面（項目例：もしもあなたがよい成績をとったとしたら，自分に能力があったからだと思う）」「達成領域・失敗場面（項目例：もしもあなたが授業の発表をうまくできなかったとしたら，自分に能力がなかったからだと思う）」「対人領域・成功場面（項目例：もしもあなたに友達が沢山いるとしたら，自分に魅力があるからだと思う）」「対人領域・失敗場面（項目例：もしもあなたに友達がいないとしたら，自分に魅力がないからだと思う）」の4下位尺度からなる。回答は「1全く当てはまらない」から「5かなり当てはまる」の5件法により評定を求めた。

抑うつ　Center for Epidemiological Studies Depression Scale（CES-D）の矢冨，Liang, Krause, & Akiyama（1993）による翻訳（20項目）を用いた。この尺度は，「うつ感情」「身体的症状」「対人関係」「ポジティブ感情」の4下位尺度からなる。回答は「0そういうことはほとんどなかった」から「2よくあった」の3件法により評定を求めた。

結果

各変数の基本統計量

Table1に各変数の平均値および標準偏差を示す。なお，性差を検討するために各変数についてt検定を行ったところ，「高目標設定」（t（212）= 3.04, p < .01），「対人領域・成功場面」（t（422）= 2.18, p < .05）において有意な得点差が見られ，女性よりも男性の方がそれぞれ有意に高かった。また，「うつ感情」においては，男性よりも女性の方が有意に高かった（t（424）= −2.65, p < .01）。その他の変数では有意な得点差は見られなかった。内的整合性について検討するため，Cronbachのα係数を求めたところ，各変数において概ね.70以上の値が得られた。

完全主義と帰属スタイルの関連

完全主義と帰属スタイルの関連を検討するために，各変数間の相関係数を求めた（Table 2）。その結果，「完全欲求」は「達成領域・成功場面」「達成領域・失敗場面」「対人領域・失敗場面」と，「高目標設定」は「達成領域・成功場面」「達成領域・失敗場面」「対人領域・成功場面」「対人領域・失敗場面」と，「失敗過敏」および「行動疑念」は「達成領域・失敗場面」「対人領域・失敗場面」と，それぞれ有意な正の相関が認められた。つまり，完全主義傾向が強いほど，達成領域や対人領域の失敗を内的安定的に帰属しやすいということである。

完全主義と抑うつの関連

完全主義と抑うつの関連を検討するために，各変数間の相関係数を求めた（Table 2）。その

Table1　各変数の性差と基本統計量（*N*=444）

	M（*SD*）			*t*検定	α係数
	全体	男性	女性		
多次元自己志向的完全主義尺度					
完全欲求	16.21（3.95）	16.49（4.20）	16.08（3.84）	.99	.82
高目標設定	17.55（3.47）	18.37（3.83）	17.21（3.25）	3.04**	.73
失敗過敏	13.29（3.90）	13.02（4.07）	13.41（3.82）	-.94	.76
行動疑念	17.80（3.56）	18.09（3.77）	17.68（3.47）	1.11	.68
内的安定的帰属スタイル尺度					
達成領域・成功場面	10.80（2.43）	11.15（2.42）	10.65（2.42）	1.94	.85
達成領域・失敗場面	10.87（2.21）	10.65（2.56）	10.96（2.04）	-1.20	.55
対人領域・成功場面	9.94（2.55）	10.35（2.46）	9.77（2.57）	2.18*	.85
対人領域・失敗場面	9.72（2.26）	9.44（2.43）	9.85（2.18）	-1.62	.56
抑うつ					
うつ感情	4.63（3.68）	3.92（3.72）	4.94（3.63）	-2.65**	.84
身体的症状	3.75（2.55）	3.84（2.72）	3.72（2.47）	.44	.65
対人関係	.71（1.07）	.77（1.15）	.69（1.03）	.73	.70
ポジティブ感情	3.71（1.82）	3.78（2.05）	3.68（1.72）	.54	.64

*p<.05,　**p<.01.

Table 2　各変数間の相関係数（*N*=444）

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
完全主義											
1.完全欲求	—										
2.高目標設定	.58**	—									
3.失敗過敏	.51**	.18**	—								
4.行動疑念	.46**	.25**	.38**	—							
帰属スタイル											
5.達成領域・成功場面	.13**	.25**	.06	.02	—						
6.達成領域・失敗場面	.16**	.18**	.20**	.14**	.29**	—					
7.対人領域・成功場面	.07	.16**	-.07	.05	.47**	.14**	—				
8.対人領域・失敗場面	.25**	.14**	.34**	.24**	.11*	.49**	.17**	—			
抑うつ											
9.うつ感情	.21**	.04	.29**	.22**	.02	.07	-.03	.26**	—		
10.身体的症状	.23**	.12*	.26**	.25**	.01	.05	-.02	.15**	.67**	—	
11.対人関係	.12*	.05	.24**	.19**	.02	.01	.00	.22**	.56**	.43**	—
12.ポジティブ感情	.01	.11*	-.22**	-.05	.13**	-.14**	.21**	-.18**	-.23**	-.25**	-.25**

*p<.05,　**p<.01.

結果，「完全欲求」は「うつ感情」「身体的症状」「対人関係」と有意な正の相関，「高目標設定」は「身体的症状」「ポジティブ感情」と有意な正の相関，「失敗過敏」は「うつ感情」「身体的症状」「対人関係」と有意な正の相関，「ポジティブ感情」とは有意な負の相関，「行動疑念」は「うつ感情」「身体的症状」「対人関係」と，それぞれ有意な正の相関が認められた。つまり，完全主義傾向が強いほど，抑うつ傾向が強いということである。

共分散構造分析による検討

分析対象者　大学生444名のうち，回答不備のあった25名のデータを除き，419名（男性126名，女性293名，平均年齢20.06歳，*SD*＝1.96）のデータを有効データとして分析の対象とした。

(1) 観測変数の吟味

観測変数の採用については，各潜在変数を最もよく表すと考えられる3項目を用いることにした。具体的には次に述べる通りである。

完全主義　完全主義の適応的側面である「高目標設定」5項目に対して主成分分析を行い，因子負荷量の高い上位3項目を観測変数とし，これらに共通する潜在変数を「適応的完全主義」とした。「高目標設定」を取り上げた理由として，「完全欲求」は，完全主義の基本的な性質であるため，完全欲求だけでは精神的健康に何らかの影響を及ぼすことが少ない（桜井・大谷，1997）ためである。同様に，完全主義の不適応的側面である「失敗過敏」5項目に対して主成分分析を行い，因子負荷量の高い上位3項目を観測変数とし，これらに共通する潜在変数を「不適応的完全主義」とした。「行動疑念」は強迫症状との区別がつかない（小堀・丹野，2004）という指摘があるため，本研究では失敗過敏を完全主義の不適応的側面の中心であると捉えることとする。

帰属スタイル　内的安定的帰属スタイル尺度に関しては，各下位尺度が3項目ずつしかないため，そのまま採用することにした。

抑うつ　CES-D20項目に対して因子分析（主因子解・バリマックス回転）を施したところ，2因子を抽出した。2つの因子はそれぞれ抑うつとポジティブ感情の内容に該当した。因子負荷量の高い上位3項目に共通する潜在変数を仮定し，これらを「抑うつ」「ポジティブ感情」とした。

(2) モデルの構成

因果モデルでは，抑うつを最終的に説明される変数とし，完全主義傾向を原因側の変数とした。両者の媒介変数として，帰属スタイルを想定した。よって，完全主義，帰属スタイル，抑うつという3つの構成概念の関連がモデルの骨格となる。

さらに，桜井・大谷（1997）は，完全主義の下位尺度の得点がともに高い者を典型的な完全主義者と設定する必要性を提案しているため，「適応的完全主義」と「不適応的完全主義」の潜在変数間に相関を仮定しモデルを完成した。

(3) モデルの検討

完全主義，帰属スタイル，抑うつを構成すると想定した観測変数を用いて，最尤法により共分散構造分析（SEM）を行った。有意でないパスを削除し，再度分析を行い，適合度が最も良くなる時点まで分析を繰り返した。その結果，Figure 1に示したモデルが最終的に得られた。

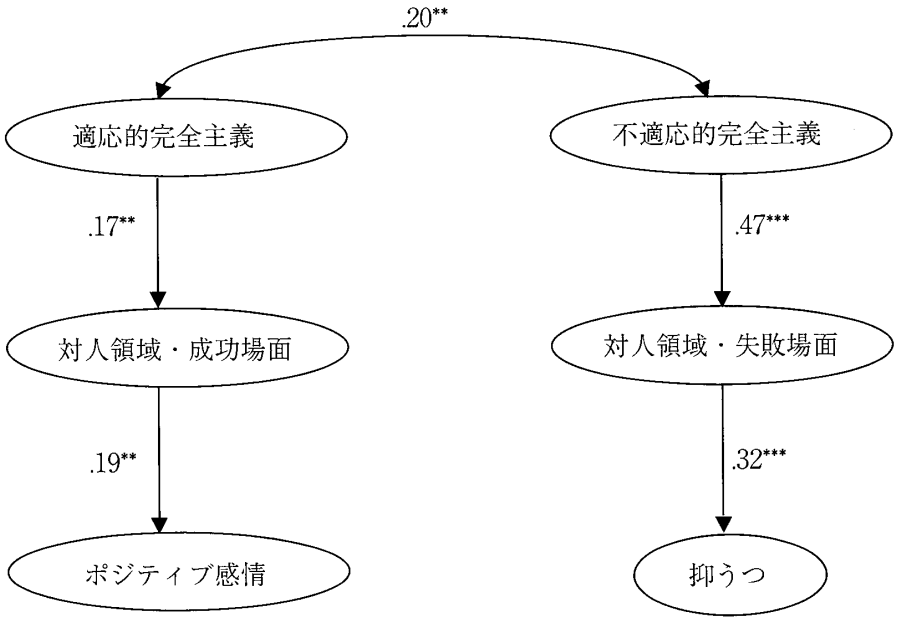

Figure1　完全主義，帰属スタイル，抑うつに関する因果モデルと分析結果
注1．数値は標準化された因果係数を表す。
　　また，観測変数および誤差変数は省略した。
注2．5%水準で有意なパスのみ記載した。
注3．$^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$。

最終的なモデルの適合度指標はGFI = .94, AGFI = .92, RMSEA = .05となり，モデルによるデータの説明率には問題がないと判断した。使用した観測変数と影響指標をTable 3に示す。Table 3より，影響指標の値は最低でも0.4程度であり，多くは0.7以上であったことから，各項目はそれぞれの構成概念の指標として妥当であると判断された。

外生的潜在変数の相関係数は「適応的完全主義」と「不適応的完全主義」が.20であった。まず潜在変数間の影響関係については，「適応的完全主義」から「対人領域・成功場面」に正の影響関係（.17）が見られた。「対人領域・成功場面」は「ポジティブ感情」に正の影響（.19）を及ぼしていた。また，「不適応的完全主義」から「対人領域・失敗場面」に正の影響関係（.47）が見られた。「対人領域・失敗場面」から「抑うつ」に対する正の影響関係（.32）が見られた。モデルは結果変数の分散を，それぞれ「ポジティブ感情」= 4%，「抑うつ」= 10%の範囲で説明していた。

同様のモデルを用いて，男女間で各完全主義

Table 3　観測変数とその影響指標

構成概念と観測変数	影響指標
適応的完全主義	
高い目標をもつ方が，自分のためになると思う	.75
自分の能力を最大限に引き出すような理想をもつべきである	.75
いつも，周りの人より高い目標をもとうと思う	.57
不適応的完全主義	
完璧にできなければ，成功とはいわない	.78
少しでもミスがあれば，完全に失敗したのも同然である	.78
人前で失敗することなど，とんでもないことだ	.55
対人領域・成功場面	
もしもあなたが好きな人と付き合うことになったとしたら，自分に魅力があるからだと思う	.92
もしもあなたの異性関係がうまくいっているとしたら，自分に魅力があるからだと思う	.88
もしもあなたに友達が沢山いるとしたら，自分に魅力があるからだと思う	.65
対人領域・失敗場面	
もしもあなたに友達がいないとしたら，自分に魅力がないからだと思う	.57
もしもあなたの異性関係がうまくいっていないとしたら，自分に魅力がないからだと思う	.55
もしもあなたがしたことを友人から批判されたとしたら，自分に才能がないからだと思う	.51
ポジティブ感情	
楽しいと感じた	.81
うれしいと感じた	.76
さきゆき明るいと感じた	.41
抑うつ	
悲しいと感じた	.90
泣いたり，泣きたくなった	.80
さびしい気がした	.65

から帰属スタイルおよび抑うつへの影響が異なるかどうかを多母集団同時分析によって比較した。その結果，女性は同様の結果を得られたが，男性では，「適応的完全主義」から「対人領域・成功場面」へのパスが有意でなかった。以上のことから，男女に共通している部分は，「不適応的完全主義→対人領域・失敗場面→抑うつ」であり，「適応的完全主義」から「対人領域・成功場面」へのパスに関しては，女性のみに見られる関連性と考えられる。

考察

本研究の目的は，完全主義と帰属スタイルの関連を検討し，完全主義が不適応的な帰属スタイルを媒介して抑うつに至るというモデルについて共分散構造分析を用いて検討することであった。その結果，以下のことが示された。(a) 完全欲求は達成領域・成功場面，達成領域・失敗場面，対人領域・失敗場面と，高目標設定は達成領域・成功場面，達成領域・失敗場面，対人領域・成功場面，対人領域・失敗場面と，失敗過敏および行動疑念は達成領域・失敗場面，対人領域・失敗場面と，それぞれ関連がある。(b) 適応的完全主義は対人領域での成功を内的安定的に帰属することでポジティブ感情を得る一方で，不適応的完全主義は対人領域での失敗を内的安定的に帰属することで抑うつに陥る。これらの結果を踏まえ，各変数間の関連について議論する。

完全主義と帰属スタイルの関連について

本研究の第一の目的は，完全主義と帰属スタイルの関連を検討することであった。分析の結果，完全主義の基本的性質である完全欲求と適応的側面である高目標設定は，全般的に内的安定的帰属との関連が強いことが示された。しかしながら，完全主義の不適応的側面の失敗過敏と行動疑念は，成功における内的安定的帰属とは関連せず，失敗における内的安定的帰属とのみ関連することが示され，これが不適応につながると考えられる。これらの結果から，適応的完全主義と不適応的完全主義の相違を帰属スタイルの視点から説明できたといえる。また，完全主義者は適応的であっても不適応的であっても，帰属の観点から言うと，内的安定的帰属をする特徴を持っている。このことから，完全主義者は出来事に対して，自分の能力などで解決できると信じている可能性がある。逆を言えば，統制不可能な事態であっても内的安定的に帰属する可能性が高く，これが不適応につながると考えられる。これは，失敗過敏傾向の高い者が自身に関する統制不可能な事態で自己非難的に振る舞うこと（大谷，2004）とも関連していると思われる。

完全主義，帰属スタイル，抑うつの影響関係について

本研究の第二の目的は，完全主義が不適応的な帰属スタイルを媒介して抑うつに至るというモデルについて共分散構造分析を用いて検討することであった。帰属スタイルを完全主義と抑うつの媒介変数として因果モデルに組み込んだ分析の結果，適応的完全主義者は対人領域での成功を内的安定的に帰属することでポジティブ感情を得る一方で，不適応的完全主義者は対人領域での失敗を内的安定的に帰属することで抑うつに陥ることが示された。このことから，不適応的完全主義者の抑うつへの予防や治療のための心理的介入を考えると，帰属スタイルの変容を促すことで，効果が得られることが示唆された。これは，帰属スタイルの変容が抑うつの治療には不可欠であるという指摘（富家，2004）からもいえることだろう。さらに本研究の結果から，抑うつに影響するのは，対人場面における帰属であることが示された。不適応的完全主義者の抑うつを予防するには，帰属療法が有効であり，その中でも対人的な帰属に焦点を当てた療法が重要であると考えられる。

なお，性別による多母集団同時分析を用いて検討した結果，女性は男女全体のモデルと同様の結果を示した一方で，男性は，「適応的完全主義」から「対人領域・成功場面」へのパスが有意でなかった。この男女差が何に起因するのかについては，本研究の結果だけでは判断するのは困難であり，今後さらに検討する必要があると思われる。

本研究の課題と今後の展望

以下では，本研究で十分に検討できなかった点について取り上げ，今後さらに有効な示唆を得るための課題について述べる。

第一に，本研究で使用した帰属スタイル尺度は，「もしもあなたが希望する職業に就けたとしたら（・就けなかったとしたら），自分に能力があった（・能力がなかった）からだと思う」「もしもあなたの異性関係がうまくいっているとしたら（・うまくいっていないとしたら），自分に魅力がある（・魅力がない）からだと思う」といった項目内容からなっていた。これらの項目は帰属スタイルだけではなく自己評価の高低を反映している可能性がある。そのため，今後は今回使用した尺度とは異なる尺度を用いて，同じ結果を再現出来るかどうか，さらなる検討を行う必要があると考えられる。

第二に，本研究では，完全主義が不適応的帰属スタイルを媒介して抑うつに影響を及ぼすパスを想定している。しかしながら，1回の調査だけで因果を証明することは困難であるため，今後は同一個人に対して一定期間置いて追跡調査を行い，因果の方向性を明確にすることが重要な課題となるであろう。

第三に，本研究では，完全主義を適応的側面と不適応的側面とに分けて，帰属スタイルおよび抑うつとの関連を検討しているが，実際は適応・不適応的側面が両方高い人物，適応的側面のみ高い人物，不適応的側面のみ高い人物が存在することも考えられ，完全主義の保有パターンが異なる人々を想定することも出来るだろう。しかしながら，今回の研究では，完全主義の保有パターンを検討していないため，今後は完全主義の下位尺度の得点をパターン化して分析を行う必要性があると考えられる。

以上，今後に検討すべき課題点について述べてきた。これらの視点を組み込んで検討することにより，完全主義の今後の研究により有益な示唆が得られると考えられる。

引用文献

Burns, D. D.(1980). The perfectionist's script for self-defeat. *Psychology Today*, November, 34-52.

Chang, E. & Sanna, L.(2001). Negative Attributional Style as a Moderator of the Link Between Perfectionism and Depressive Symptoms: Preliminary Evidence for an Integrative Model. *Journal of Counseling Psychology*, **48**, 490-495.

Hewitt, P. L., & Flett, G. L.(1991a). Dimensions of perfectionism in unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 98-101.

Hewitt, P. L., & Flett, G. L.(1991b). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.

家接哲次・小玉正博・田上不二夫（2001）．内的安定的帰属スタイルと抑うつとの関連の検討　筑波大学心理学研究，**23**，169-177.

石田裕昭（2005）．大学生の完全主義傾向と課題解決方略の非効率性：なぜ彼らの努力は報われないのか　社会心理学研究，**20**，208-215.

伊藤　拓（2004）．抑うつの心理的要因の共通要素としてのネガティブな反すう　心理学評論，**47**，438-452.

小堀　修・丹野義彦（2004）．完全主義の認知を多次元で測定する尺度の試み　パーソナリティ研究，**13**，34-43.

大谷保和（2004）．自己志向的完全主義の２側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討―統制不可能事態への対処を媒介として―　心理学研究，**75**，199-206.

大谷佳子・桜井茂男（1995）．大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究，**66**，41-47.

桜井茂男・大谷佳子（1997）．「自己に求める完全主義」と抑うつ傾向および絶望感との関係　心理学研究，**68**，179-186.

Tangney, J. P.(2002). Perfectionism and the Self-Conscious Emotions: Shame, Guilt, Embarrassment, and Pride. In G. L. Flett & P. L. Hewitt(Eds.), *Perfectionism: Theory, research, and treatment*(pp.199 – 215). Washington, DC: American Psychological Association.

富家直明（2004）．どうして憂うつになるのか？〔さまざまな帰属療法と抑うつ・認知療法〕　坂本真士・佐藤健二（編）はじめての臨床社会心理学―自己と対人関係から読み解く臨床心理学　有斐閣　pp.41-61.

矢冨直美，Liang, J., Krause, N., & Akiyama, H.(1993)．CES-Dによる日本老人のうつ症状の測定―その因子構造における文化差の検討―社会老年学，**37**，37-47.

The relationship of self-oriented perfectionism to internal-stable attributional style and depression

Michiko Saito　Mejiro University, Graduate School of Psychology
Tatsuo Sawazaki　Mejiro University, Faculty of Human Sciences
Hiroyuki Konno　Mejiro University, Faculty of Human Sciences

Mejiro Journal of Psychology, 2008 vol.4

【Abstract】

The purpose of this study were to investigate the relation between self-oriented perfectionism and internal-stable attributional style, and used causal modeling to investigate the relation of self-oriented perfectionism, internal-stable attributional style, and depression. 444 college students completed a questionnaire that measured self-oriented perfectionism, internal-stable attributional style, and depression. Results showed that Desire for Perfection and Personal Standard related internal-stable attributional style in success scene and failure scene, whereas Concern over Mistake and Doubting of Action related internal-stable attributional style in failure scene. Also, the results of covariance structure analysis were as follows: Adaptive perfectionism promoted internal-stable attributional style in success scene, the internal-stable attributional style in success scene promoted positive emotion. Maladaptive perfectionism promoted internal-stable attributional style in failure scene, the internal-stable attributional style in failure scene promoted depression. The results were discussed in terms of their implications for intervention.

keywords : self-oriented perfectionism, internal-stable attributional style, depressio